

1. 1970年から1979年までの10年間に、1244例から40菌種、2315株の細菌を分離同定した。

単独感染と混合感染の比率は55%を混合感染が占めた。

2. この10年間で、慢性中耳炎検出菌に、特に大きな変化は見られず、Staphylococcus (以後S.) aureus, Pseudomonas, aeruginosa が主で、以下Corynebacterium, S. epidermidis, Proteus mirabilis, Proteus inconstans の順であった。

3. 単独感染と混合感染を比較してみると、単独感染では、S. aureus, P. aeruginosa が主で、S. epidermidis, Corynebacterium, Proteus 属は検出率が低く、混合感染でのS. epidermidis, Corynebacterium, Proteus 属の検出率が著明に多かった。

4. 1970年～1974年までをI期、1975年～1979年までをII期として分類すると、両期を比べて検出率で特に大きな変化を示したものはないが、II期での

Proteus 属の検出率の増加が目される。

5. その他、I期、II期を比べて増加してきたものには Serratia などの腸内細菌、Achromobacter などの非発酵性グラム陰性桿菌などがある。

6. 嫌気性菌は、I期と比べるとII期が約6倍の検出率を示し、また、術後再発例、上鼓室化膿症、中心性穿孔の順で検出されやすかった。

質疑応答

杉田(順天堂大) われわれも多剤耐性症例を経験したが、特徴は以下のごとくである。

① ペニシリンāゼ抵抗性PC、セファロsporin系、GM などアミノ配糖体系に耐性でDOXY, MINOのみ感性であった。

② このような症例は、中耳炎術後再発例で、術後感染予防に、セファロsporin+AMKを使用していた(追加)。

過去10年間の慢性中耳炎検出菌の 薬剤感受性の変化について

大谷 美弥子 ・ 河村 正三 ・ 市川 銀一郎
杉田 麟也 ・ 田中 幹夫 ・ 後藤 重雄
藤巻 豊 ・ 福田 正弘*

各抗生物質に対する慢性中耳炎検出菌の薬剤感受性の変化について10年間の成績をまとめた。

症例は順天堂大学附属病院における外来患者1244例、2315株である。薬剤感受性検査は3濃度ディスク法を用い、感受性成績の卍および卍を感性とし感性率を求めた。

結果は以下のごとくであった。

① 1970～1979年の間に著しい耐性化のみられた菌はS. aureus とP. inconstans である。

② S. aureus とS. epidermidis はPCG, AB PC に対する耐性株が増加している。

③ P. inconstans はABPC, セファロsporin

系, GM などアミノ配糖体に対して著しく耐性株が増加している。最近Proteus の検出率が増加していることとあわせて考えると今後特に慢性中耳炎では治療上やつかいな菌になることと思われる。

④ S. aureus, P. aeruginosa の最近分離した株のSBPC, CEZ, CFS, GM に対するMICを報告した。

質疑応答

馬場(名市大) セファロsporin系ではCERがS. aureus に現在でも最もよい抗菌力を示すとされている。S. aureus に対するセファロsporinの感

* 順天堂大学医学部耳鼻咽喉科学教室

性低下にディスクが CER から CEZ に変えられた点の影響はないのか。

大谷 (順大) CFS と CEZ では異なると思いま

すが、私達のデータが CFS から CEZ にかわつたのは、中検が CEZ を用いるようになったからです。

慢性化膿性中耳炎分離の多剤耐性ブドウ球菌の 薬剤感受性に関する検討

野 村 隆 彦*

慢性化膿性中耳炎の耳漏より分離される細菌のうち、黄色ブドウ球菌の検出率は、グラム陽性球菌に有効な抗生物質の発達した現在でもなお首位を占め、しかも多数の薬剤に耐性を示し、治療上の障害となる症例が増加していることから、最近の黄色ブドウ球菌の薬剤感受性に関する検討を行った。

本年2月から5月までの4カ月間に細菌学的検索を行った40耳(重複を含まず)から分離された48株のうち黄色ブドウ球菌は23株で、緑膿菌の11株に比して圧倒的に多く、全体の48%を占めた。検出した23耳のうち14耳は非手術耳、9耳が手術後の耳漏再発例である。これらのうち単独感染は18耳であった。

分離菌の薬剤感受性を PC, ABPC, SBPC, EM, LCM, CET, CER, DOXY, TC, SM, AMK, GM の12種類の薬剤について、ディスク法で検討したところ、全薬剤に(++)以上の感受性を示したのは2例

だけで、残りの21例はいずれかの薬剤に耐性を示し、しかも全体の70%にあたる16例が5剤以上最高8剤耐性であった。多剤耐性となる症例の耐性パターンは PC, ABPC, EM, LCM, SM の5剤に耐性であることが多く、それに加うるに GM, SBPC, AMK の順で耐性を示した。

GM は1974年～1976年の当施設での耐性率成績が1%であったのが今回は43%と急激な増加を見せしており、しかも GM 耐性である場合は必ず5剤以上の多剤耐性であった。GM 耐性株増加は GM 局所投与に関連あるものと考えられ、当施設の長期間受診者に多くみられたことから、GM の局所投与について再検討を要するものとする。CET, CER, DOXY, TC についての耐性は今回の成績ではほとんどなかったが、今回はこれらの薬剤に対する耐性株の問題も重視されるようになるであろう。

鼻疾患における嫌気性菌検索成績

西本 敬子・棚橋 聡子・森崎 京子
浅井 栄司・赤木 博文[†]・渡辺 邦友
上野 一恵^{††}・沢 赫代^{†††}

鼻疾患における嫌気性菌について検索した。

〔I〕被験者

1978年10月より1980年6月までの期間に、岐阜

大学耳鼻科を受診した97名を対象とした。内訳は、併合性副鼻腔炎39名、術後性頬部嚢腫20名、上顎腫瘍4名、前頭洞炎4名、急性副鼻腔炎4名、その他

* 愛知医科大学耳鼻咽喉科学教室

† 岐阜大学医学部耳鼻咽喉科学教室

†† 岐阜大学医学部嫌気性菌実験施設

††† 岐阜大学医学部中央研究室